



イブン・ハルドゥーン自伝7

訳・註…高野太輔
佐藤健太郎
湯川武
茂木明石

凡例

1 本稿は、『イスラーム地域研究ジャーナル』に連載中の以下の訳稿の続編である。

柳谷あゆみ・阿久津正幸・中町信孝・橋爪烈・原山隆広・吉村武典・高野太輔・佐藤健太郎・五十嵐大介・湯川武・茂木明石・中村妙子訳註「イブン・ハルドゥーン自伝1―6」『イスラーム地域研究ジャーナル』一一六、二〇〇九―二〇一四年、四五―五八、三五―五六、四七―七二、六五―九八、七七一―一〇二、三一―四九頁（以下、「イブン・ハルドゥーン自伝」と略記）

2 翻訳の底本は、以下のイブン・タウウィートによる校訂版を用いた。

İbn Khaldūn, *al-Taʾrīf bi-İbn Khaldūn wa rihlat-hu sharḥun wa sharḥan*, ed. Muhammad İbn Tawīt al-Tanjī, Cairo: Matbaʿat Lajnat al-Talīf wa al-Tarjama wa al-Nashr, 1951（以下、*al-Taʾrīf*と略記）

また、翻訳にあたっては以下のフランス語訳を適宜参照した。

İbn Khaldūn, *Le Livre des exemples. T.I Autobiographie, Muqaddima*, tr. Abdesselam Cheddadi, Paris: Gallimard, 2002（以下、*Autobiographie*と略記）

3 イブン・ハルドゥーンの『歴史序説』および彼の史書『省察すべき実例の書』は、彼の自伝を読み解くうえで参考になるところが多い。主に使用したのは、以下の校訂版および日本語訳である。

İbn Khaldūn, *Tārīkh İbn Khaldūn al-musammā bi-Kitāb al-ʿIbar*, 7 vols., Beirut,

1971（ブーラーク版のリプリント。以下、*al-ʿIbar*と略記）

Prologomènes d'Ebn Khaldoun: texte arabe publié d'après les manuscrits de la Bibliothèque impériale, ed. M. Quatremère, Paris, 1858（以下、*Prologomènes*と略記）

イブン・ハルドゥーン著、森本公誠訳『歴史序説』全四巻、東京…岩波書店（岩波文庫）、二〇〇一年（以下、『歴史序説』と略記）

4 訳文と原文の対照がしやすいよう、訳文中に「p.002」などとして校訂版のページの切れ目を示した。

5 年代は、訳文ではアラビア語原文のヒジュラ暦表記を西暦に換算した上で、ヒジュラ暦／西暦の形式で記した。一方、註では必要な場合を除いて西暦のみ記した。ヒジュラ暦を西暦に換算する際、年代を決定しがたい場合には「六八五／一二八六―七」とした。

6 訳文中の括弧のうち、「」は訳者による語句の補足、（ ）は簡単な語彙の説明や言い換えである。また、『』は書名を示す。【 】は訳註者が付け加えた小見出しである。詩や長文にわたる引用は、一段下げて記した。

7 アラビア語のカナ表記は大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』東京…岩波書店、二〇〇二年の方式に拠った。また、クルアーンの引用はカイロ版の章節番号に従い、日本語訳は原則として井筒俊彦訳『コーラン』全三巻、東京…岩波書店、一九六四年を用いた。

※二〇一四年三月八日、この七年間、共に「イブン・ハルドゥーン自伝」の翻訳に取り組んでこられた湯川武先生が逝去された。今回の訳稿の中には湯川先生の担当箇所も含まれているが、これは先生が遺された下訳に研究会メンバー全員で検討を加えて文章を整えたものである。大きな支えを失ってしまった我々であるが、先生の遺志をついで完訳をめざし、今後も訳出を続けていくつもりである。

【イブン・ハティーブの起草になるナスル朝からハフス朝への書簡】(承前)

先祖たちの間には——彼らに神の慈悲と満足あれ——愛がありました。その「愛が」結ばれた場所は、神のおかげで、強固になりました。その「愛の」しっかりとした寝床である寝台は、まるで明文規定^①のように明らかな誠実さゆえに、柔らかいものとなりました。そして、それを失う者が痛苦を味わうような、互いの誠実を誓い合う約束もありました。神に祈ります、必ずや、あなた方の美德が新たとなりますように、「あなた方の」好意が強くありますように。

いまや、あなた方の如何なる高貴な性質を述べたらよいのか、あなた方の如何なる美德を説明したり、賞賛したりすればよいのか、我らには分かりません。お互いの交流の始まりとなった、あなた方の往信について述べればよいでしょうか、それとも、あなた方の贈り物について賞賛すればよいでしょうか。それについて叙述しようとすればベンは水の流れるごとく進み、そのベンがもたらす英知の馬銜^{はみ}によってイスラームの敵は黙ります。我らは、敬虔な行いの報酬を支払って下さるお方(神)への、たっぷりの慈悲と絶え間なく続く恩恵の持ち主への、感謝の目方を計って「差し出します」^②。そのお方は、蟻一匹の重さほども、蟻一匹に足らぬ重さほども、出し惜しみすることはありません^③。彼以外に神はなし。

もしあなた方が現在の「我らの」状況や、「不信仰者どもの」脆く愚かな忘恩の理由を——それも神の思し召しによるものですが——お知りになりたいのであれば、我らは珍しいもの(新しい情報)をあなた方に与えましょう。我らはいつままで、その一端をあなた方に知らしめましょう。それは、以下の通りです。

あてのない望み「に迷った」後で、神が我らを試練「の場」からしかる

べき場所(神の道)に連れ戻したとき、^④「p.100」我らは、神の救いにより目薬を塗って、正しいことを見分ける視力を取り戻しました。我らは、短い人生の努力を、神の道に捧げることになりました。我らは、気付きました——我らはそのように聞いていたし、昔から言われていることではありませんが——現世が、横切するための橋に過ぎないということに。もし悪魔が誘惑し、喜びが不信仰^{カフ}の寝台に眠らせてしまったら、彼らの墓の上をうろろる歩いても何の役にも立ちません^⑤。また、我らは気付きました。「現世が、」それを与えられた人が幸せになることも、元気づけられることもないような持ち物であることに。いやむしろ、現世とは、ただ語られるお話に過ぎないのです。さらにまた、悲しみは「富や財産のように死んだら」むりやり捨てさせられるものと変わらない^⑥ということに、人生が夢であることに、人々は眠っているだけだということに、我らは気付きました。おそらく、宿を出立する(現世を去る)人は、それを破壊して煙をあげさせるか、そこに芳香と、あとで来る人のための説教師となる賛辞を残すかのどちらかなのです。

我らは諸事について公正を基盤とし、境域を楊枝で磨くこと^⑦、精査し、眠るときにはジハードの伝承と同衾し、その伝承が定めるところをイジュティハードの根拠としました。「これ、信徒の者よ、わしがお前たちに、「酷い天罰を蒙らずにすむような」うまい儲け口を伝授しようか」という神の言葉^⑧を、殉教の理由の一つとしました。

我らは、その運命が風前の灯となった諸々の「敵の」皆へと急ぎました^⑨。警戒されるべき場所は暗闇に覆われています(誰も守りにつく者がいない)。裸の皆は、触れようとすると手を払いのけられません^⑩。その住人は^⑪「p.101」哀れであり、頂上にいる白い脚のカモシカは、純潔を守りきれません。

我らは、名譽の白刃で皆の山道を飾りました。我らは、ユーフラテス河の真水^⑫で、皆の井戸をたっぷりと満たしました。我らは、何重もの鉄板で、皆の門を覆いました。我らは、褒美を支払ってくれるお方(神)の許での、戦いの報酬を期待できる身となりました。我らは、純白の石灰で、皆の服を白くしました。今日では、その皆を見る人が、一片の白い雲か、円い満月に向けてのばされた「白い」指と見間違えるほどです。それらは、現世と来世の恐怖に対して、信徒たちに安全を保障しているのです。

我らは神に、貸付金を貸しました^⑬。我らは、軍の記録されたもの

(ディーワーンに登録された正規兵)を富貴にしました。我らは、軍に毎月公正に俸給を支払いました。我らは、讃えられるべき富貴な神を信頼して、戦旗の陰に我が身を委ねました。我らは、異教徒の王に対しておあいことなるように¹³協約を破棄しました。

我らは言いました。「我らの主よ、あなたこそは力強い。全ての暴君は、あなたの力強さゆえに卑しい。あなたの党派こそが数多い。それ以外は少ない。あなたさえいれば、他の何者もいりません。あなたの約束こそは、必ず果たされる約束です。だから、我らの上に耐える人々の衣服を着せかけて下さい。あなたの満足にあずかる人々、それを勝ち取る人々のうちに、我ら「の名」を書いて下さい¹⁴。我らの足もとを強固にして下さい、不信仰な人々に対して我らを援けて下さい」。

我らは、最初の動きとして、そして祝福の帳簿の最初の頁「に載るべき事績」として、「各地から」軍勢が集まらぬなか、¹⁵「p.18」我らの下にいた輝かしい軍隊と部隊だけを率いて、「眼下を見下ろす俣」ことイスナハル¹⁶へ、道を踏み外し人を惑わす敵の鎧へ、蝮の毒を吹き出す者のもとへ、出発しました。そこへ到達するのが難しく、そこが高く、その丘が聳え立つとしても。敵が熱心に準備をし、武器と糧食を蓄え、勇士を選び出しているとしても。

我らは自らの身をもって、その火に耐えました。我らは、その熱に耐えつつ、力強い刃をもってその毒矢に立ち向かい、丸い大岩や石礫に立ち向かい、イスナハルをめぐって殉教者たちと「戦果を」競い合いました。そしてついには、そのお方によらずしては何の力もないお方(神)の力によって、我らはその近寄りた塔と城壁に登り、祖国と人々から、「イスナハルの」害悪を追い払いました。それに先立って、「イスナハルの」隣人であるサフラ要塞¹⁷をも、もてなしてやりました¹⁸。

我らは旅立ちに先立って、警護兵と、守備兵と、増え続ける糧食でそこを満たしました。そして、自らの手で、戦いによって壊れたり、競い合う男たちが穴をあけたりしたものを、修繕しました¹⁹。

我らは、塹壕の戦いにおける、我らの預言者——彼に神の祝福と平安あれ——に倣いました。彼がかの地域(メディナ)を護り、話に伝わるラジャズ詩の即興が行われたとき「のように、我らも詩を歌いながら作業したのです」²⁰。²¹「p.18」不正な人々が集まり、不品行な人々が互いに呼び合い、悪人がはびこっている状態の中で、イスナハルを放っておいたらイス

ラームに安定はありませんでした。

我らは先に、ブルゴの町²²を奪還すべく、「アングルス」西半にいる信徒達を奮起させました²³。その町は、二つの拠点、ロンダとマラガの間で道をふさぎ、二つの町の人々に分断という弱さの衣を被せ、その安らぎを乱していました。眠っている最中に現れる幻影は、夢の中にしか訪れて来ることはできません。「マラガとロンダの間の」やり取りも、鳩の鳴き声の翼の内にしかありません(伝書鳩に頼るしかない)。喉が掻き切られ、「殉教者を迎え入れるために」天国の乙女達が装いを凝らすような戦争のあとで、神はブルゴの征服を容易にし、それを速やかに「我らに」与えてくれました。名高い娘たち(周辺の村や砦)が、この母(ブルゴ)の後に続きました²⁴。農耕と牧畜に最適な高地も続きました。その辺境は惨めな状態から立ち直り、イスラームの顔は、その地が救われたことで、洪面から輝く表情に変わりました。

次いで我らは、遠く敵国の真つ只中に置かれたウトレーラの町²⁵へ、広野の恐怖と破壊の幽鬼が襲いかかる中を、動き始めました。ウトレーラは、ヒムス(セビーリヤ)²⁶の人々が養女とした町——彼らがその家を富貴にし、嫁入り道具を立派なものとし、何くれとなく世話をしやり、周辺の土地を開拓した町です。²⁷「p.184」

ウトレーラがムスリムたちを憤慨させた原因、すなわち捕虜になっていたムスリムが皆殺しになったことゆえに、我らは、遠く厳しい道のりを乗り越えてでも、ウトレーラを指すことを固く決意しました。かつては、ウトレーラのそばを安全に、その地の凶鳥すらも吉兆に見えるほど「平和に」通り過ぎていたのに、彼らは捕らえられて重い枷にはめられ、疲れ果て、虜囚の苦しみ辱められ、日々ひどい目にあわされていました。そして、奴らは彼らをいっぺんに虐殺してしまいました。彼ら「の死」は、人々(ムスリム)の目に訓戒として残りました。奴らは彼らを殺したことによって、残された遺族の怒りと、高貴な復讐の誓いを、イスラームへ贈る(惹起する)羽目になりました。

そして我らは、ウトレーラを攻撃しました。我らは、道に迷うことも、物忘れすることもないお方(神)からの靈感をもって、この町を急襲しました。騎兵は朝駆けし、夜になると歩兵が迫いついて来て、ウトレーラは悲嘆に包まれました。

護られていたものは奪い放題となり、ウトレーラは破壊されました。そ

の町の白き建物から新月の輝きが消え、月のごとき美しさは失われました（壊されて美しい姿が失われた）。その町の人々の血によって渴きは癒され、炎はその町の寺院を焼き尽くしました。その町の何千もの人々が捕虜となり、攻撃は娘（ウトレーラ）を奪われたセビーリヤにまで及びました。その町にいるキリスト教徒の貴顕の顔は、卑屈な表情でいっぱいになりました。ムスリムたちは、言葉で表すことも、運びきることもできないほどのものを、手に入れました。¹⁸⁵

そして、我らは戻りました。大地は捕虜で波打ち¹⁸⁶、ライオンの住処には獅子の仔一匹たりとも残らず、緑の土地にはカモシカ一頭たりとも残りませんでした。高貴な女達（捕虜）は疲れ果て、さらびやかな造作物（戦利品）は人々の目をくらませます。夜旅を終えて、迎えた朝は、讃えられました¹⁸⁷。夜旅をさせ給うたお方に讃えあれ。あの破壊された教会堂と集会所の群の中で、熱情の舌は呼ばわれます、「おお、捕虜達を殺した者どもよ！」と。

戦利品が分配され、何の印も付いていないラクダが輝かしい印を付けられ、先を行く人々と後に遅れる人々（先陣を切って勇敢に戦った者とそうでない者）とがはっきりしました。そしてハエンの町¹⁸⁸への遠征に人々が集まりました。我らはその町へ、元氣良く影と戯れる（かのように疾駆する）騎馬達を駆りました。勇者達は、神の御許にあるもの（殉教した後の来世での幸福）を期待して、喜び勇んで危地に飛びこみます。鞘から素早く抜かれるインド鋼の剣は、「敵の」首へと我先に襲いかかります。我らは、戦闘の準備を油断なく念入りに行いました。我らは、ジハードを望み、砦（リバート）に入ることを望む者から、不都合を取り除きました¹⁸⁹。ジハードの土埃は、地獄の煙から救ってください。¹⁹⁰我らは呼びかけました、「ジハードだ！ジハードだ！おお、ジハードのウンマよ！導き手たる預言者の旗よ！楽園は、利剣の影の下にあり！」

至高なる神への「道に誘う」その呼びかけは、あらゆる耕地と荒地を揺り動かししました。多くの人々が、真理への呼びかけを通じて、命令に従いました。人々は長く伸びた山あいの道から、あるいは徒歩で、あるいは瘦せラクダに乗って、やって来しました。おびただしい数の戦旗は、色においても、数においても、谷間の花々をしのぎました。集結した軍勢は、広い通りの筋々を「埋め尽くして」ふさぎました。その軍勢の波立つ海は、高潮のようでした。その軍勢には、誰も端を見出すことができません。

この「ハエンの」町は、子沢山の母親であり、楽園です。ただし、その町に住む不信仰者達にとつて、永遠の住処は「地獄の」業火の中にしかありません。この町は、王権の座所であり、首飾りの真ん中の真珠の隣にある玉です。かつては、多くの美点が数えられ、繁栄し、その他の諸邑と秤にかければ、「ハエンの」町の方に秤が傾いたものでした。「ところが今は」獅子の住む藪となり、黒い毒蛇の巣穴となり、恐ろしい偶像の据えられた場所となり、やかましい音を立てる鐘の吊された場所に成り果てました。

我らは幾日もかかる道のりを越えて、そこに近づきました。我らは、「我らを」運んで進む海「の波のごとき馬群」を連れて、海岸に打ち寄せるがごとく、そこを目指しました¹⁸⁷。「ハエンの」近郊に近づき、もう少しでその灯が見えそうになると、いよいよ我らはその町を攻撃すべく動き出しました。輝く星々を散りばめた地平線の装飾ベルト¹⁸⁹は巡り終わり、朝「の光」に侵されそうな夜は恐れのみ白髪となっていました。鷲（アルタイル）¹⁹¹は吉兆のもとにはばたき、槍（アークトゥルス）¹⁹²はイスラームの力強さによって復讐を果たします。駝鳥の星々¹⁹³は、しし座を恐れて身体を震わせ怯えます。いて座は、次々と下される恩寵という的に向けて、いつもの弦をもつて幸福の矢を射かけます¹⁹⁴。¹⁹⁵ふたご座は、天の川を横切ろうとしています。金星は、シリウスに嫉妬の炎を燃やします。水星は軍馬¹⁹⁶を率いて、略奪された町の上に縦糸をかけて織り上げ、その意匠を競い合い、「相手」を黙らせませす。火星は輝き、その白き旗をもつて「兵を」鼓舞し、「血を」流します。¹⁹⁶木星はジハードの美德において考えうる限りのことをし、取引の場において幸福な商談の成立を目指しひたすら競い合います。土星は東の地平¹⁹⁸から離れ、第一〇の家（天頂）¹⁹⁹を去り、幸運の星²⁰⁰ですら滑って沈んでいく場所（西）に沈みまします。満月「が昇るときに」は、投石機の石のごとく現れます。いかにして、その月は山の頂上まで届くのでしょうか？日の出の場所を見れば、地平線の壁に穴が空いて太陽が現れるように見えます。

隠れていた朝の光があらわとなり、風がもたらす朗報の挨拶に旗が大きくはためいた時、我らは獅子が獲物を見下ろすがごとく、雄馬が自分の花嫁を見下ろすがごとく、その町（ハエン）を見下ろしました。そして我らはすさまじい力強さと堅固さの光景を、見事な普請と造作の光景を目にしました。その中に高くそびえる要塞は、冷たい雲に覆われ、雨雲の冷たい

水で渴きを癒やしていました。//p.190//また星の花々を摘み、「帯の中の腕」^③をつかむため、たおやかな手首を高くかかげていました。また我が目にした町は、腕尺で広さを測ろうとしても測りきれないほどで、起伏のある土地や荒れた土地に広がっていました。そして我らは言いました。「おお神よ、あなたの僕の手にその町を戦利品として与え給え。そしてその町で我らにジハードの奇跡の一つを見せ給え」。

我らは、その町が位置するとても広い平原に、降り続く恵みの雨のようにしておいた、その平野の中から「イチジクとオリブ」の章^④を見いだして吉兆だと思いました。その町は、誘惑にとらわれた町であり、それゆえに慈愛あまねきお方の安全保障から解かれた状態にありました。貴重なる魂の熱情と敢然たる勇気をもって我らは兵をせき立てたので、彼らが戦闘配置についたり^⑤、遠くの兵が所定の集合の合図を聞いて近くに集まったり、従者が主人に合流したり、投石機が到着の二ラクア^⑥をしたりする間もないほどでした。兵たちは、彼らの方へと荒野を旅してきて戦場の喧噪の場に先んじていた「敵の」騎士たちを押しやり、ついにはその者たちをその町に押し込め、親ですら子を忘れてしまうような「過酷な戦いの」場所です。忍耐の衣服を奪いとりました。そこでは、矢が雲霞のごとく降り注ぎ、鳩の群れのように飛んで定めめの死をもたらします。また、最初は雨や流れ星のようだった槍が折れ「るまで戦い」ます。//p.191//槍先の波で戦塵の海はうねり、うち続く関の声で大地は揺れます。さすればあなたが目にするのは、天の乙女たちによって死に場所に日陰を作ってもらえる殉教者と、かの海が岸辺へとうち捨てていく斃れた骸と、そして神のもとで面目が立つ「までよく戦った兵たちの」顔や喉元に突き刺さった矢ばかりです。よく切れる剣はもみあげのところが「血で」染まり、槍は枝に実がなり、兜は保護すべきものを守っています。弓の背は割れ、不信仰な軍隊の絆は断たれています。「兵が」最期を迎える時に盾の紙は下に落ち、白き剣がふるわれて文字が書かれ、黒き槍で突かれて点が打たれます。また同時に、大きな郊外区が襲われました。神はよく見て考えることのできる者（神に従うだけの分別の持ち主）には自らへの信仰の偉大さを示しました。一方、悪魔は自分の友を見捨て、不信仰者たちは身ぐるみはがされて放り出され、ありとあらゆる場所待ち伏せされて打ち倒されました。

その後、「我らは」戦いながら城内へ入り、その町は殺戮と略奪に覆われました。//p.192//神の時（終末）の到来について、その日の恐ろしさについて、

で、そしてその恐ろしさのひどさについて教えてくれるのは、剣と槍の他にはありません。家や建物の破壊について、その住処の貯えから「奪って」裕福になることについて、そして第一の存在から第二の存在へと移行すること^⑦についても同じです。剣が切り裂き、尋常ならぬ状態をもたらしました。ルダイナの槍^⑧は血を飲み、まるで挿し木した枝や接ぎ穂のように今にも葉が生えそうな状態でした。数々の弓は天球のように「丸く引き絞られて」雨あられのごとく「矢を」降り注ぎ、びゅんびゅんと鳴り続けてついに声が枯れてしまいました。弓があまりに必要とするので、矢が尽き果ててなくなってしまうのです。殺された者たちの遺体は道をふさぐほどで、通りゆく者の妨げとなりました。神は敵を根こそぎにし、根絶やしにしました。一方、殉教者をお側に寄せ、耐え忍んだ者に充分すぎるくらい「報償を」与えてやりました。かつて聞いたこともないような勝利を告げる使者たちが先触れとなり、インク壺の口から説教壇の耳へと朗報を届けました。

我らは数日間そこにとどまり、木々を切り倒し、「敵の」巢穴を破壊して根こそぎにしました。偶像崇拜の徒に復讐する舌は呼びわります。「おお、アレクサンドリアの仇よ」^⑨。フィジャール^⑩の渴きを癒し、//p.193//隣人の権利を守ったのでした。そして我らは、「神の」配慮の風で旗の翼が羽ばたく中で、街道の線でできた「神による」成功の魔方陣^⑪が一致する中で、神の力の市場が繁盛する中で、そして「神の」優しさを運ぶ者^⑫——神に讃えあれ——が一緒に同行する中で、帰還しました。赤ひげ^⑬の首は山より高く積み上がりました。捕虜となった高貴な女たちは、「馬の」背の騎手の後ろに乗せられました。山と積まれた鐘が器械^⑭と工夫で「吊り下ろす際に」がらりと音をたてました。そして、この母（ハエン）の死とともに、その豊かな乳房から乳を吸い、心地よく養われ守られていた娘たちも死を迎えました。破壊は城壁全体に及び、炎がその荒廃を早めました。//p.194//

それからハエンの後、我らは勝利に向けて動き出しました。水をくむ前に水桶を持たせた案内人を送り出したところ、「水くみを」許すとの知らせがもたらされました。そこで我らはウベダ^⑮の町を目指しました。それは双翼のもう片方、二人姉妹の姉であり、滅亡の時をハエンと共に迎える町です^⑯。その町は風吹きすさぶ広大な地を占め、その郊外区「が広がる様は」はあたかも紙の上に文字を書きなぐったかのようなものでした。またそこに

は、稼ぎの大きい商業地があり、均整のとれた姿があり、収益を計算しようとしたら疲れ果ててしまいそうなほど「豊かな」耕地がありますが、また同時に人を刺す働き蜂やたくさんの雄蜂がいる蜂の巣もあります。そうしたウベダの賑やかな住処に破滅がおりたちました。死という葡萄酒の杯が、剣という指先によって、酒におほれたその住人たち⁵³の間で回されました。そこに災厄の前衛部隊が朝駆けをし、その城壁の内奥に向かって、「壁を」切り開く湾曲したつるはしが奮起しました。⁵⁴「p.195」そして我らはその町に剣の力でもって入城しました。それは幻影がすつと訪れるよりもすばやいものでしたが、それがいかにかというところは尋ねないで下さい。このみじめな町にふりかかったような破滅は、今まで、どんな豊かな町にも、着飾って裾をひきずって歩くどんな高貴な女にも、ふりかかったことがありますでした。その町に立ち並ぶ塔は「倒れて」火の神々に跪拝し、梯子は土埃にまみれてしまったのです。そして、その町は全身を放棄という衣でまとい「人がいなくなり」、その町の教会にあるガゼルの住処からは何もいなくなつて、荒れ放題となりました。

それから我らは、不信仰の町々の母、豊かな装飾の宝庫、そして諸国にとどろく名声と風聞の主、すなわちコルドバに対する攻撃の準備をしました。⁵⁵「コルドバの」本質というものを、どうやったら知ることができるでしょうか。「コルドバには」装いをこらした後背地があり、堅固な山があり、誇るべき建物があり、輝く花々⁵⁶があり、そして限りなき美点があります。そこでは、空の満月の光輪のような⁵⁷「p.196」高く建てられた城壁が町を丸く囲んでいます。天の川のように滔々と流れるコルドバの川は鞘から抜かれた剣のごとく茂みから流れ出で、それに隣接しています。天球のように規則正しく回転する水車は軸がまっすぐで、最初の恋人⁵⁸を恋い慕い思い出しながら、愛しい思いを響かせます。そこでは、山がまるで王冠のごとく、甘い「雨」滴の銀色で飾られ、ホスローやダレイオスの王冠を見くだすほどのです。そこでは、延々と伸びるいくつもの橋のアーチがまるでやせて腹のくぼんだ何頭ものラクダにも似て⁵⁹、「p.197」隊列をなして川を渡っています。そこでは、アーミル家のジハードの戦士が残した跡が⁶⁰、名所旧跡の中で芳香を放っています。そこでは、雨雲の恵みが愛しい庭園の花嫁たちのもとに訪れ、ばらばらと真珠の「雨」粒をもたらしします。ここでは、北風で冷やされた酒が朝な夕なに大木たちの間で回されており、枝が酔っているのが見て取れるでしょう、本当に酔っているわけではない

けれども。そこでは、征服の手が、谷間のアネモネの乙女を奪います。ここでは、「p.198」微笑むカモミールの口に魅惑的なそよ風が訪れてきて接吻し、そのために嫉妬深い星々の胸は動悸がします。ここでは、古き礼拝所が広い空間と高いミナレットを持ち、ワリードの会堂⁶¹を見くだし侮るほどのです。そこでは、マハル種のラクダのこぶが切りとられるように、地表が繁栄の鋤刃で掘り起こされ、また地中が雨雲に浸されて乙女の腹のように柔らかくなっています。そして人を導くほどに目立ついくつもの大木の間をぬうように、どこへゆくかも分からないたくさん的小川が流れています。⁶²「p.199」

次に挙げるもの、どれでも好きなものを選んでみて下さい。草の茂る平原。良き休息地と休憩地。理性あるマールイクとアキール⁶³。「言った」「言われた」としやべり続けるナイチンゲールのいる茂み。軽重相並ぶもの⁶⁴。麦の穂——それは、茎の上にあるものと茎の軸そのものが、まるでアリフの上に付されたハムザ⁶⁵か、並んだ小枝の先にとまっている姿美しき小鳥のようにみえます。また東風や南風になびき、その中は穀粒の真珠で一杯です——。谷間——そこは、涸れた泉など聞いたこともなく、もし聞いたことがあればそれに復讐を求めたことでしょう。また、そこにアヤメやスイセンの咲くとき、花々のドームの白き者たちに仕えるよう送り出されるのは、黒き奴隷たるミツバチだけです——。耕作の海原——「あまりに広くて」その岸边にたどりつくことはできません。また、川に向かってその海原を旅する者は、遠くまで行き着くことはできません——。夜話の集まり。夜明けの雲の涙の水たまり——「水かさ」増した時でもそこをあえて渡りたければ⁶⁶「p.200」越えていく橋があります——。アムルとかザイドとかの「並の人間の」ものでない土地⁶⁷。その中にあらゆる獲物のつまった野生ロバ⁶⁸。これらのうちからどれを選ぼうとも、その座所（コルドバ）は、イスラームのカリフが座するに足るものであり、またルサーファ宮⁶⁹と「アーチ」橋によって平安の家⁷⁰を嫉妬させるものです。ペンの言葉が、それ（これら列挙したもの）を描写するのに、度を越すなどということがあるでしょうか。あるいは、それ（これら列挙したもの）でもって、かの完全なるもの（コルドバ）を説明することが言葉の技にできるでしょうか。さて、我らはコルドバに向けて夜間に出発し、馬を引いて進軍しました。その馬の前髪には神が恵みを結びつけていました⁷¹。そして、驚嘆をよびおこすコルドバの郊外で止まり、豊かな実りをもたらすコルドバの城外で

隊列を整えました。人びとの心は、豊かに与える寛大なお方（神）に援助を乞い、信徒を助け天恵を下すお方（神）に天使たちの援軍を願いました。馬どもは我らの背後の離れた場所ですまり、かつてのイスラームの地についてうたいあげていました。

止まれ。恋人とその住まいを想い出して、さあ泣こう。⁶⁹

そのとき、コルドバを守る守備兵のうちから、熱い火を生み出す薪炭のうちから、そして剣が刈り残した数多くの者たちの中から、豪雨をもたらす雲の片鱗と逆巻く海の高波とが現れてきました。p.201 戦場の勇者たちの陰には、弓矢隊の兵士たちも数多くいました。そして、どっしりした山のごとき赤ひげの猛者たちが、戦列を整えにかかりました。コルドバの町を覆いつくすのは、ゆったりとした鎖帷子「をまとった兵たち」や、町がみじめな目に逢う「敗北の」日に味方の民を十字架への捧げ物にする王侯たちや、神の証とその使徒を町が受け入れる際に妨げとなる豚どもでした。⁶⁹ つまりコルドバは、視界をさえぎる闇の帳と、岩のように頑な心とに覆われていたのです。

川を分かち、その「水滴」銀や真珠でコルドバの胸元を飾りあげる橋の前で、両軍の間に戦いがおこりました。その戦いは、どんな時代にも織り成されたことのないようなもので、またどんな合戦もそれと同じような恐怖をはらんだことがないようなものでした。その戦いをフィジヤールの戦い⁷⁰になぞらえる者は、嘘をつき真実から逸れています。あるいはそれをジャフル・アルハバーアの戦いにたとえる者は、愚かであつたと言っています。p.202 それをダーヒスとガブラーの戦い⁷¹に似ていると言う者は、故事を知らないのだから、経験と知識がある者に尋ねるべきです。それをジャバラ溪谷の戦い⁷²に並ぶと考える者は、注意を欠いています。あるいはそれをバトン・アーキル⁷³と同じと考える者は、理性がありません。あるいはズー・カールの戦い⁷⁴を持ち出して主張する者は、知識を欠いています。あるいはカディードの戦い⁷⁵をもって弓競べをしようとする者の矢は、的外れです。

実のところその戦いの場合は尋常ならぬものでした。それは、「牧地を探す」案内人であっても言葉で説明できないような魂の牧地であり、山々すら震えるような場であり、そして悪魔のスルターンのための貯えも備えも

台無しになるような荒地でした。そこでは、勇敢な益荒男が戦士の印をつけ、切れ味よい白刃が紅に染まり、しごかれた槍がたわみ、めったに動かない岩が転がり、p.203 曲げられた弧（引き絞られた弓）から素早い芽吹き（矢）が獲物めがけて放たれ、そして、次々と送られる矢にのつて、どこから伝えられたか分からない伝承が語られました。その後、槍が出番をむかえて、乱戦に入りました。槍の穂先は鎖帷子に突き刺さり、まるで魚が網に刺さっているようです。やがて、飼い主のいるラクダといないラクダ（敵味方）が入り混じり、ルダイナの槍は前線から下がりました。そして、剣の出番が戻ってきて、水面のようにきらめく鎖帷子を何本もの川筋へと切り裂いた後、王冠のように脳天へとふり下ろされました。小川と化したいくつもの鎖帷子は一つになり、やがて大河となりました。「鎖帷子が」互いに抱き合う様子は、目にうつるのが殺戮に次ぐ殺戮ばかりなので、別れの挨拶の抱擁のようでもあり、碎かれたものがまた一つになったようでもあり、永遠の別離へと誘う者に応えているようでもありました。

気高い人たちは、忍耐強く「戦った」後の結末を知りました。吉報をもたらず伝令たちが疾風となつて、勝利の風とともに吹きました。それから、奔流がその大波に加勢し、「正しい信仰とそうでないものを」見分ける力が心を磨き上げ、決意が「信仰の」精髓を純粹にしました。そして神の助けの言葉が語られました。「さ、門から入ってそいつらに攻め掛かれ」⁷⁶。そうして、不信仰者の集団は、大きな刃の鎌に刈り取られることになりました。彼らの兜は、それをかぶって安全と思っている者たちをあつさり裏切り、彼らの頭は容赦なく落とされました。多くの旗が「コルドバへの」道に立ちほだかる塔⁷⁷や城壁の上に高く翻りました。p.204 我らには知り得ない「神の」定めゆえにそれ以上の攻撃はできませんでしたが、もしそうでなかったら、町の上には破壊の翼がはばたいていたことでしょう。⁷⁸

それから我らはコルドバの川を渡りました。そして神の手によりその町に厳しく圧力を掛け、包囲を狭め、腰の周りの真珠のように町の周りを白い天幕で取り巻きました。我らは数日間コルドバに留まりました。その間、驚のごとき軍旗が獲物の上を回りながら飛んで、大木に向かって破壊を投げかけ、町の各地区に火をつけました。雨によって妨げられなければ、我らはあの故地の征服という目的を達成できたことでしょう。⁷⁹。そこで、果樹を根こそぎにし作物を引き抜くことでコルドバを馴致し、その地の作物

や住居に対して手当たり次第に風のような襲撃を続けよう和我らは考えました。それは、イスラームがコルドバを味わい、またコルドバにある「ムスリムの」遺産がふたたび神の恵みを享受できるようにするためでした。いくつもの喉を切り裂き、破壊の石礫^{いしつぶて}を追い立てられるべき敵に投げつけた後で、コルドバの地から大勢が一斉に動き出しました⁸⁶。我らの背後では、集められた敵の家畜が海の波のように押し合いへし合いしていました。

我らは、コルドバの広大な果樹園と海のように続くブドウ園を、債権者が債務者を責め立てるようなやり方で荒らしました。コルドバの豊かな光景をいまわしい光景とおきかえ、我らの主が「そこに災害をお放ちになったので」「朝になって見たら、すっかり摘み取った跡のように⁸⁷」になりました。ふさふさとした髪を剃り上げるように、生い茂っていた樹木に火を付けて丸裸にし、⁸⁸コルドバの斜面のいたるところに煙雲が立ちのぼりました。その香りはガミームの戦い⁸⁹でのバーンの木を思わせます⁹⁰。我らは、襲撃の風を送り込み、「それに吹かれたものは何一つ残らず、みなぼろぼろになって⁹¹」しまいました。

その後、我らは、剣が刃を振りかざすように川が水位を上げて恐るべき状態になるのを目の当たりにしました⁹²。我らが困っていると神が川を静めて下さり、その機会を捉えようと人々が渡し場で動き出しました。我らは、川の流れという質問者をつかわして、ユーフラテス川の息子アサド⁹³に尋ねました。すると彼は、渡河する方がよいという法的見解を出しました。その結果、略奪取り放題の状況があたり一帯に広がりました。守られていたものは辱められ、村は略奪され、砦は破壊され、木の根は引き抜かれ、枝は粉々に碎かれました。我らは、今日にいたるまでコルドバへの襲撃をやめることはなく、朝駆けしては惨めな状態にし、洪面の日に大笑いをする白い星々をその町の上に昇らせるのです。

今やコルドバは、絶え間なく馬の駆け回る場所であり、槍の穂先が刺さったままの場所であり、そしてまた、荒れ果てた廃墟において悲しみが繰り返される場所なのです。クルアーンを山に落とせば山が恐れて畏まり粉々に割れてしまうようなお方（神）⁹⁴の力をもつて、⁹⁵また、暴君たちがそのお力ゆえに恐れ入って従うようなお方（神）の威光をもつて、あたかもコルドバは身を低くしてムハンマドの呼びかけ（イスラーム）に急ぎ向かったようでありました。

我々は帰還しました。旗はたたまれて再び開かれることはなく、戦士た

ちの顔は喜びにあふれて厳しい表情が混じることなく、人々の手は固き絆（信仰）⁹⁶をしつかりと握り、人々の舌は神の恩寵への感謝を語り、剣は鞘という寢床で煩悶し、鎖帷子はすっかり古びています。駿馬は借金が返されるように馬小屋へ返されることにいらだち、怒りをこらえて涙にむせび泣いています。馬たちは我々に非難のまなざしを向け、武装「した兵士」を乗せて堂々たる走りを見せていた戦場や牧地を離れ、子供たちが学校へ戻るのと同じように「いやいや」戻ります。太鼓は栄光の言葉で鳴り響き、触れ役は決然と賞讃すべき帰還を告げ、槍はその戦いの後ではめったにしないことなく、戦利品を分配する者は面前に稀有な価値の捕虜を並ばせ、報酬の水場にやって来る者は追い払われることも放っておかれることもなくいつまでも水を飲み続け、冬の後に次の季節がめぐってくるように「次の出番を待つ」同胞たちは望みの品をさがします。神は難事を容易にし、望み通りの恩恵を与えることができるのです。そのお方以外に神はありません。

我らにとって、神の優しき恩顧は何と美しく、神の隠れたる恩寵はなんと惜しみないことでしょう。⁹⁷「⁹⁸おお神よ、我らはあなたへの賛美を数えつくすことはできません。あなたをおいて他の者へと庇護を求めはしません。あなたのもと以外で現世と来世の幸せを願いはしません。それゆえ、無から創り出したそれを繰り返すお方よ⁹⁹、我らを常にご加護下さい。生けるお方にして永遠にあり続けるお方、望むことを何でもなすお方よ、次々に増えていくようなやり方であなたからの恩賞を通して我らをお助け下さい。

あなた様（ハフス朝君主アブー・イスハーク）の幸いなる書簡が我らのもとに届いたのは、遠くまで評判がひびき彼方の人の目にまでうつる勝利と、塵にかすむ星よりもさらに上にとどまる誇りとを「我らが」獲得したのと時を同じくしていました。我らは、その叶いがたき望みがついに叶ったことに驚きました。そして言いました。「恩恵は到来した人の足元にある」。すなわちキリスト教徒の王¹⁰⁰は、いくつかの砦をまとめて我らに「引き渡し」厚意を示したのです。その砦はかつてイスラームの王国から奪われ、その神の家（モスク）には偶像が据えられていました。神が、悪臭にかえて芳香を、三位一体にかえて唯一神信仰を、我らの努力を用いてそこに置きますように。不在だった父が愛しい娘たちのもとへと戻り、息災だったかと尋ね、まぶたにあふれる情愛こもった涙をぬぐってやるように、

イスラームはそれらの砦のもとに戻ってきました。それは、我らが経験した時代の中では、ルーム^㉔がめったに歩むことのなかったみじめな道であり、稀な出来事の中でも特に稀なことでした。神が、我らとあなた様に、絶えず惜しみなく贈り物を与えて下さいますように。そして我らを「礼拝において」身をかがめ平伏する者として、「神への」感謝のミフラーブの前に置いて下さいますように。

まだ説明すべきこともありますし、「説明しようとするれば」神がそれを容易に達成させてくれるかも知れませんが、まずは我らはあなた様に諸々の状況をかいつまんでお知らせしました。//p.208<それは、あなたの信仰心に神が与え給うたことを語ることであなた様に喜んでいただき、唯一神信仰の栄光という冠をあなたの額の額にかぶせ、そしてあなた様のために祈願をしてアーメンと言うためには、細部までくまなく述べるのは困難だからです。信徒が同胞のためにひそやかにこなす祈願とは、鋭い武器であり、豊かに与えて下さるお方（神）からの望み通りの贈り物をねだる時にはそれをまちがいに保証するものです。あなたは、敬虔さを分かち合い、心の奥の純粹さで神に接する人のなかでも、「祈願に」もっともふさわしい人です。あなた様の一族に由来する美德はどこにあっても、一族のうちの生きている方たちの特質であり、亡くなった方たちの遺産です。あなた様には古くからの地に足ついた美質があります。カリフ位の落ち着く場はあなた様のイーワーンであり、マリーク師——神が彼を嘉し給いますように——の弟子たちが住み着いた場はあなた様のカイワーン^㉕です。説教壇では常にイマームとしてあなた様の名が唱えられ、唯一神信仰^㉖とはあなた様の旗印を喧伝することであり、不信仰に対する名高い出来事^㉗はあなた様の治世に関連することであり、高貴な教友たちはあなた様の国土を征服し切り開いた人たちであり、「真偽を分かち人」——彼の上に平安がありますように——の後裔^㉘はあなた様の権威と深く結びついています。我らはもつとあなた様の手紙の恵みを得たいと思いますし、もつとあなた様の側近くにありたいと思います。事情が許せば、あなた様の御門にさらに多くのことをお知らせしたことでしよう。

手紙では目に見えないものをお伝えすることはできませんが、力強く至高なる神が、我らに代わって、あなた様にしかるべき謝意を伝えることを引き受けて下さるでしょう。神は、実績が残るようあなた様にご長寿を賜ることでしょう。そして肉体ではなく魂の場（来世）においても、多くの

人があなた様を愛するようにして下さるでしょう。かのお方は——讃えあれ——、あなた様に幸いをもたらし、あなた様の栄光を守り、あなた様のもとに恩寵を絶えず与えて下さるでしょう。

すばらしい平安が、かぐわしく純粹で祝福され優しく遍き平安が、特にあなた様にたつぷりと届きますように。そよ風が吹いて葉を落とし、ニp.209<微笑むように光る稲妻がまだつばみの花に雨雲の杯を回した後、なんと高く朝日は輝かしい顔を上げるのでしょう。神の慈悲と恩恵がありますように。

【イブン・ハティープからイブン・ハルドゥーンへ子息誕生を祝う書簡】

イブン・ハティープはまた、私の息子の誕生を祝福し、その誕生の知らせが遅れたことを咎める手紙を私に送って寄こした^㉙。

おめでとう。アブー・ファドル・リダー、そしてアブー・ザイドよ^㉚。

あなたは恐るべき不正や欺瞞から保護されました。

ご子息^㉛は、幸運の星が昇り、末長く幸福な人生を送ることでしょう。

彼はアムルやザイドのような並の人間ではありません。

神への感謝によって神の恩寵をつなぎ止めておきなさい。

神の恩寵という野生の動物は、感謝という枷以外は拒否します。

ようこそ、学校では星のように輝き、ゆくゆくは高位に登りつめる者よ。また、怒れる時代を鎮める者にして、木星と水星^㉜のもとに生まれた者よ。いらつしゃい、最も幸いなる時に昇ってきた星にして、最も見晴らしの良い場所で輝く星よ。こんにちは、吉報と、家族や一族の栄光、及びホスローやアルダシール^㉝も手にすることができなかった誇り高き王冠とを豊富に持つ者よ。//p.210<

今やハドラマウト族^㉞の住処はこの騎士によって支えを得ました。家畜は、この見張りの保護の下、安心して思うままに草を食べました。周転天球^㉟のごときマドラサの車座^㊱は、太陽「のようなご子息」^㊲によって幸運を得ました。そのすばらしい果実は木を植えた人の目を喜ばせました。アービリー^㊳の知見もイブン・ダークリス^㊴の探求も、見下されるほどでした。世の難問には警告が発せられました。「貴女はなんと長い間、隠れてい

ることに慣れ親しみ、諸々の知性に対して、力を行使してきたことでしょ
う。しかし今は、貴女の保護地からすべてを奪う襲撃に備えなさい、いっ
そのこと貴女の赤い唇を独り占めするこの勇者の仲間になりなさい。」

なんとすばらしい占星図^⑨でしょう。その中では木星が祝福し、祝って
いました。彼の寿命は、その「四年の」養育年^⑩に対して十分であり^⑪、
「養育年を超えて生きること」を「保証していました。水星は、占星図に向
かって、喜びの衣を身にまとい、裾をひきずりながら自慢げに歩きま
わっていました。そして、区界^⑫がはつきりとし、p.211顔^⑬は喜びに輝
き、三角宮^⑭は幸運を期待し、またそれを望んで互いに競っていました。
「星の家」^⑮は、その宿命を告げました。高貴な人^⑯の視線は、眉毛で合図
をしていました。交替する光輝星^⑰は、悔い改めて、辞去する言葉を述べ
ながら、急ぎ帰ろうとしていました。子供たちの家（バイト・アルバーニ
ン）^⑱は、子をもたらず宮^⑲を独り占めにしていました。月の歩みは、
ジャウザヒッルの頭とティンニーンの尾^⑳を踏み越えていました。p.212
年の回帰^㉑は、占星図の中で出自の判断と完全に一致し、この新生児は数
ある誕生時^㉒の中で父親の寿命との関係を明らかにし、数百度の角度を
渡っていました。二つの幸運の星は、新生児の一〇番目「の家」^㉓と一体
となるように重なりました。レグルス^㉔は、彼の中心からわずか一分のと
ころに位置し、彼の敵の家^㉕に備わっていた憎しみと妬みを奪いました。
動点^㉖の道という道は、お出かけになる御主人様の前を清めるように、清
められました。老人は梯子から井戸に落ち^㉗、土星^㉘は大いなる害^㉙の方
に追いやられていました。

何故、高みが得られず、王冠が載せられないということがあろうか。

木星は昇る星であり、太陽はハイラージュ^㉚であるのだからp.213//

幸運の星が、喜び楽しみながら占星図の馬場の中を走り回り、

巡る天球は良く走る馬であるのだから。

あなたのご子息は——神が彼をお導き下さるでしょう——揺りかごから
「神の」正しい道へ、腕に抱かれた状態からからベンを思いのままに駆使す
る状態へ、また乳母の背中から一足飛びに「神の」お導きを受ける究極の
場所に移ることが目に浮かぶようです。神が保護を彼の上にお守りとして
置き給いますように。また、彼を妬む者たちには、食することが禁じられ

ている「絞め殺された動物」、「角で突き殺された動物」、「墜落死した動
物」、「打ち殺された動物」^㉛の肉の分け前を与え給いますように。神が急
ぎ満ちてゆく彼という新月を、また満ちた後の彼をも保護し給いますよう
に。彼がその父と母を喜ばせるよう神がお計らい下さいますように。

しかしながら私は——神が貴兄をお許し下さるでしょうが——「神への」
感謝のために身をかがめ、平伏して祈るものでありますが、非難し咎める
ものであります。私にこの知らせを伝える便りがしたためられ、その手紙
を送ることがおそろかにされるはずはないと私は思っていました。ですが、
事態は正反対のものでした。満足していた状態は揺らいでしまいました。
今回たまたま起きたことは、本来あるべきことではないでしょうが。

p.214//

考えられる理由は、はつきりしています。二つのうちのどちらかである
ことは間違いありません。一つは公正さが無かったからでしょうか。しか
し、綱をより合わせるように、「あなたが」私を気にかけていることや、ジ
ズやも屈従も入り込まない平和の約束を交わしているのですから、それは
あり得ません。二つは「あなたが私から」どれほど恩恵を受けてきたか、
ご存知なかったからでしょうか。しかし「私があなたに対して」どれほど
の権利を持っているかご存知であり、「あなたは」駄々をこねることもな
く、満足していることを考えれば、それもまたあり得ません。そのような
次第で、よくわからなくなってしまうのです。せめて納得のいくように
事情を説明して下されば良かったのでしょうか。

もしも私のような者が、しかるべき恩恵にふさわしい高貴なるあなた様
への神の御恵み「息子の誕生」について知らされなければ、誰がその知ら
せを受け取るのでしょうか。また、高貴なるあなた様の衣装は誰に対して
披露され、広げられるのでしょうか。あなた様は、「こちらの」消息ばかり
尋ね、うわべだけの付き合いを飾り、払うものも支払わず、「その実」あな
た様の傷は癒えぬまま異国の地に居ることにすっかり慣れてしまいました。
暗闇は「あなた様の」胸全体を包み込んでいるというのに、あなた様は悲
しみを「自ら」慰めています。

また、「人と人との友誼における」もろもろの権利を忘れなければならな
い時が来たとしても、私は決して忘れることはありません。また、天も地
も私に不利な証言をすることはありません。私が貴兄に対してしかるべき
行為をしていないとしても、希望、期待は持ち続けて下さい。私には、貴

兄に対する称賛をはつきり述べる理由となるだけのラクダがいるのです¹³¹。

私は、威厳あり至高なるお方（神）にお願ひします。彼自身（イブン・ハルドゥーン）と財産及び息子たちのことで喜びをもたらして下さいますように。また、ハイラージュの贈与の最大のものを彼の最も小さい年となし給いますように。そして、北天の星々の肩という肩に彼の願ひという剣帯をおかけ下さいますように。

もしも貴兄が、*ḥabīb* 友の状況を知りたいと思ってくれたならば、良き隠遁¹³²のような状態であり、神からの雨雲のような慈悲を得た状態であり、また慈雨の前触れである稲妻¹³³のような状態であり、「ヒシャームよ。汝の背後にあるものを語れ」¹³⁴と言われるような状態です。以下のように語るとは、我々の師¹³⁵はなんとうまく言ったものでありましょうか。

もしも私が、我が心を最も気にすべきことに向けなかったとしたら、

私に神のお恵みなどありませんように。

もしも、信仰一筋の隠遁生活以外が私の気がかりであったとしたら、

神が私の心配ごとをお増やしになられますように。

もしも貴兄が、有り難くもご自身と幸運なるご子息の様子について、それとなくお伝え下さいましたならば、この上なく善きことであり、私が見ている時には、その瞳の中にいつも貴兄がおります。平安がありますように。

【註】

(1) 原文は *ḥusn*。イスラーム法の解釈に際して典拠となる明文のこと。

(2) 人間が神の命令通り敬虔な行いに励み、神が対価として恩寵をもたらすという契約関係を、売買の取引にたとえた表現。

(3) 『クルアーン』第四章第四〇節、第一〇章第六一節、第三章第三節などに「蟻一匹の重さ」という表現が登場する。

(4) ガフラ (*ghalla*) とはクルアーンに出てくる言葉で、終末の日が近づいていることにかうかと気付かず、神の警告に耳を傾けない状態を差す。

(5) この挿入句は難解。神の教えに背いたまま人生を無駄に終えてしまったら、終末の日に墓から蘇って最後の審判を受けるときに地獄行きは間違いない、という意味か。

(6) 原文は「同じ分だけある」。

(7) 「境域 (*ḥuḡḡ*)」という語に「前園」の意味もあることを利用した表現。「磨き残さず、細大漏らさず」の意。

(8) 『クルアーン』第六一章第一〇節。

(9) ここから、書簡は七六七／一三六六年から七六九／一三六八年にかけてナスル朝がキリスト教徒に対しておさめた数々の勝利についての描写にうつる。この一連の戦いは、カステイリヤ王ペドロ一世とその庶兄エンリケとの間の内紛に乗じたもので、前者への支援を名目としておこなわれたものである。イブン・ハティープは七六九／一三六七年付けのイブン・ハルドゥーン宛て書簡でもこれらの軍事行動について書き記している。「イブン・ハルドゥーン自伝5」、八五頁参照。

(10) 「触れようとする者の手を払いのけない」とは、ふしだらな女の形容詞だが、ここでは無防備で攻撃に弱い様子の譬え。

(11) 美味しい水の譬え。

(12) 神の道のために戦ったことを指す。返済として来世での樂園が与えられる。

(13) 『クルアーン』「お前の方から公平に契約を叩き返してやるがよい（第八章第五八節）」をもじった表現。

(14) 「天の帳簿に書き付けて下さい」の意。

(15) グラナダ北西の町。「イブン・ハルドゥーン自伝5」、九七頁、註五〇参照。イснаハルについて、イブン・ハティープは他の著作でも「上空を旋回する猛禽、眼下を見下ろす隼 (*al-jarīḥ al-muhalliq wa al-bāzī al-muṭīl*)」「上空を旋回する猛禽のごとくムスリムの土地を見下ろす (*al-muṭīl 'alay-hā ḥāl al-jarīḥ al-muhalliq*)」などと表現している (Ibn al-Khaṭīb, *al-Lamḥa al-Badrīya fī al-dawla al-masrīya*, Beirut, 1978, p. 115; Ibn al-Khaṭīb, *Roḡāḡat al-kutāb wa nuṣṣat al-munāḥ*, ed. Muḥammad 'Abd Allāh 'Inān, 2 vols., Cairo: Maktabat al-Khanjī, 1980-81, vol. 1, p. 147)。この町がグラナダ盆地北西にそびえる山岳地帯に位置し、キリスト教徒の対ムスリム襲撃部隊の基地となっていたことを示す表現であろう。

(16) 現在のどこにあたるかは不明だが、グラナダ盆地の西の出口ロハの近辺に位置すると考えられる。「イブン・ハルドゥーン自伝5」、九七頁、註五五参照。

(17) 難解な箇所。「敵の援軍が来ていた」という意味か、あるいは「同じ運命に遭わせた」という意味か。

(18) 刊本では「競い合うもの (*munāḡiqā*)」に属格であることを示す符号がついているが、文意が通らないため、「穴をあける (*baqara*)」の主語として訳出した。

(19) ハンダクの戦い (六二七年) に際して信徒達が塹壕を掘っていたところ、つるはしの歯が立たない巨岩が出てきた。しかし、預言者ムハンマドが巨岩を叩くと、

- 割れたという。このとき預言者の歌ったラジャズ詩が、スハイリー（一一八五年没）の *al-Rawḍ al-ʿUnḡ* に伝えられている。また、イブン・イスハークの *al-Sira al-Nabawiya* には、塹壕を掘るときに信徒達がラジャズ詩を歌い、預言者が調子を合わせたという話も伝えられている（イブン・イスハーク著、イブン・ヒシャーム編註、後藤明・医王秀行・高田康一・高野太輔訳『預言者ムハンマド伝』全四巻、岩波書店、二〇一〇—一一年、第三巻、四一五頁参照）。
- (20) マラガとロンダを結ぶ途上の町。「イブン・ハルドゥーン自伝5」、九七頁、註五一参照。
- (21) このとき、ナスル朝領域西方のロンダおよびマラガの人々が招集されたという。Ibn al-Khatib, *al-Iḥṣāʾ fī akhbār Gharnāṭa*, ed. Muhammad ʿAbd Allāh ʿInān, 4 vols., Cairo: Maktabat al-Khānī, 1973-78, vol. 2, p. 78.
- (22) ブルゴの周辺も制圧したということか。
- (23) セビリーヤの南約三〇キロメートルにある町。「イブン・ハルドゥーン自伝5」、九七頁、註五六参照。
- (24) ヒムス（ホムス）はシリアの主邑の一つ。ウマイヤ朝末期の八世紀半ばにシリアからアンダルスに到来したアラブ将兵のうち、ヒムス軍団はセビリーヤとその近郊を入植地として割り当てられた。（関哲行・立石博高・中塚次郎編『世界歴史大系 スペイン史 一 古代—近世』、七六頁；「イブン・ハルドゥーン自伝1」、五四—五五頁、註二六参照）。
- (25) 「イブン・ハルドゥーン自伝5」、八五頁に、捕虜五〇〇〇人を取ったとある。
- (26) アラブ社会には、「朝になれば人々は夜旅を褒める（＝苦勞して得た成果は賞賛される）」という諺があった。
- (27) グアダルキビル川中流域の都市。「イブン・ハルドゥーン自伝5」、九七頁、註五七参照。
- (28) 装備・糧食・騎獣などの準備を整えてやった、の意。
- (29) 「目指しました」と訳した *ʿanay-nā*（原義は「意味する」）は、この書簡を引用する他の複数の著作によって異同がある。この書簡の引用については、「イブン・ハルドゥーン自伝6」、四四頁、註三五参照。
- (30) 女性用の阿克セサリーで、首の周り（肩の上）に巻くベルト状の革製品。
- (31) アルタイルはわし座のα星で、アラビア語の *al-ṭāʾir*「はばたくもの」が語源。
- (32) うしかい座α星のアークトゥルスはアラビア語で *al-sināk al-tānīn*（槍兵のスイマーク）と呼ばれ、その勇ましい名前が「復讐を果たします」の連想に繋がっている。
- (33) いて座の幾つかの星を合わせて、駝鳥の星々（*al-naʿāʾim*）と呼ぶ。
- (34) 「幸福の矢」と訳した *salm al-saʿāda* は「幸運籤」とも呼ばれ、太陽から月までの

- 宮の順方向に等しい距離だけ、上昇天から宮の順方向に離れた天球上の位置を表わす。ビールニー著、山本啓二・矢野道雄訳『占星術教程の書（3）』『イスラーム世界研究』第六巻、二〇一三年、五一〇—五一頁参照。
- (35) 引用によって、*khayl*（馬）、*ḥiyal*（策略）、*ḥabl*（糸）などの異同がある。
- (36) 原文は *al-ḥayl*（東の地平線と黄道の交点＝アセンダント）。
- (37) 占星術のホロスコープを作成する際に、アセンダントを起点として円周を十二分割したものを家（ハウス）と呼ぶ。第一〇の家は天頂付近にあたる。
- (38) 占星術において、代表的な「幸運の星（*al-saʿīd*）」は金星と木星。
- (39) *al-dhiraʾ bayna al-niṭāq niṭāq* は帯の意だが、オリオン座の三つ星、もしくはそのうちの二つの星のこと（鈴木孝典「アブドゥッラハマーン・スーフィーの『星座の書』における「オリオン座」および「おいぬ座」「ういぬ座」の記述」『東海大学文明研究所紀要』一三、一九九三年、一二六頁）。一方 *dhiraʾ* は腕の意だが、オリオン座の北に位置するふたご座のα星およびβ星のカストルとポルックスのことも指す（堀内勝「星と動物1」『ARENA』一〇、二〇一〇年、五六—五七）。「帯」と「腕」の正確な関係は不明だが、ハエンの城砦は町よりも約二〇〇メートル高くそびえる山の上に築かれており、その高さを星にまで届きそうであると形容した表現であろう。なお、「帯の中の星の花々 *azhar al-nujūm bayna al-niṭāq*」とする引用もある（Ibn al-Aḥmar, *Nuḥūr fawā'id al-jumūn fī naẓm fihl al-zamān*, ed. Muhammad Ridwān al-Dāya, Beirut: Dār al-Thaqāfa, 1967, p. 277）。
- (40) 「クルアーン」第九章のこと。ハエンの平野に育つイチジクとオリーブをけている。
- (41) 「クルアーン」第三章第一二節に「お前（ムハンマド）が暁に家族のもとからい立って、信者たちを戦闘配置につかせた時のこと（*ubawwī'u al-nu'minina maqā'idā li-ḡitāi*）」とある。
- (42) *rakʿāt al-quḍm* ラクアとは礼拝を構成する一連の動作の最小単位のこと。元来は礼拝の際に腰を屈めることであり、ここでは投石機の姿を描写した表現であろうか。なお、預言者ムハンマドは旅から帰る（*quḍm*）と、まずモスクに入ってニラクアを行っていたという（Muslim Ibn al-Hajjāj, *Ṣaḥīḥ Muslim*, ed. Ahmad Shams al-Dīn, Beirut, 1998, vol. 1, p. 401）。
- (43) 校訂者は、第一の存在とは目で見たり触ったりすることができるとあり、第二の存在とは意識の中のものであると解釈し、かつては現実の存在だったこの町が、意識の中のみ存在しているものになってしまったという意味だと考えている。
- (44) 「イブン・ハルドゥーン自伝6」、四九頁、註一〇四参照。
- (45) 二年前の七六七年ムハッラム月／一三六五年にキプロス王国のキリスト教徒が

アレクサンドリアを襲撃した事件のことを指す (cf. *al-Ibar*, vol. 5, p. 454; 「イブン・ハルドゥーン自伝5」、九七頁、註五七)。

- (46) *al-Fihrist*. 六世紀末のアラビア半島で繰り広げられた部族間抗争。フィジヤールとは「禁忌を破ること」であり、戦いが禁止される神聖月におこなわれたので、こう呼ばれる (*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., article on “Fijār”). ここでは、同じく神聖月におこなわれたキリスト教徒によるアレクサンドリア襲撃になぞらえられている。

- (47) *awṭāq* (単数形 *waṭq*)。正方形に並べたマス目の中に、縦・横・斜めの和が等しくなるように数字(あるいは数値を持つ文字)を書き入れたもの。魔術的な力を有すると考えられ護符などとして用いられることもあったが、イブン・ハルドゥーンはその有効性に否定的な見解を示している(『歴史序説』第三巻、三九五、四〇一頁: *Edmond Douté, Magie & religion dans l'Afrique du nord, Algiers, 1908, pp. 191-195*)。本文中の「一致する」とは、縦・横・斜めの和が等しいことをいっている。

- (48) *humalāʾ rifq* 「運ぶ者」と訳した *humalāʾ* は、*jumalāʾ* とする引用もある。正確な意味はよく分からない。

- (49) *al-suhub al-sibāl*. 元来は赤ひげが多いとされるギリシア人を指す表現で、転じてアラブにとつての敵を表すようになった (E. W. Lane, *Arabic-English Lexicon*, London, 1877, p. 1737)。

- (50) *hindām* 「均整」「対称」が原義だが、イブン・ハルドゥーンはこの原理を応用して重さものを動かす器械として、この語を用いている (*Prolegomènes*, vol. 2, p. 323; 『歴史序説』第三巻、七四頁。cf. R. Dozy, *Supplément aux dictionnaires arabes*, Leiden, 1881, vol. 2, p. 774)。

- (51) *Ubbada* (現 *Ubeda*)。ハエンよりさらにグアダルキビル川をさかのぼった所にある町。「イブン・ハルドゥーン自伝5」、九七頁、註五八参照。

- (52) 「双翼」「二人姉妹」は、ハエンとウベダの町のことを指すように読めるが、ウベダの隣町バエサを指す可能性もある。その場合は、前段落の表現をうけてこの地域の主要都市であるハエンを母と見なし、ウベダとバエサがその娘たちと解釈できる。

- (53) *mutadayyir-hā*. 動詞 *tadayyara* 「～を住居とする」の能動分詞。ただし、校訂者は註の中で「修道士たち」と解釈しており、こちらの解釈も可能性がある。

- (54) 一三六八年初頭、カステイリヤ王ペドロ一世は、庶兄エンリケ二世派が支配するコルドバを攻撃する際に、ナスル朝のムハンマド五世に支援を求めた (*Aḥmad Mujaṭṭar al-ʿAbbādī, El Reino de Granada en la época de Muḥammad V*, pp. 77-82)。なお、既出の七六九／一三六七年付けのイブン・ハルドゥーン宛書簡でも、

キリスト教徒に対するナスル朝の一連の攻勢の描写があるが、書簡が書かれたのがコルドバ攻撃の前だったので、ウベダ攻撃の記述で終わっている。「イブン・ハルドゥーン自伝5」、八五頁。

- (55) *al-yahūd*. コルドバ郊外に後ウマイヤ朝カリフ・アブドゥッラフマーン三世が一〇世紀半ばに建造した宮廷都市マディーナ・アッザフラー「花々の町」の意のことを示唆している。

- (56) かつてコルドバを支配していたイスラーム勢力のことを示唆する表現であろう。
- (57) コルドバの南を流れるグアダルキビル川には、ローマ期に建造された大きな橋がかかっている。そのアーチをやせたラクダのくぼんだ腹になぞらえている。

- (58) *al-ʿAmīr*. 一〇世紀末にハージブとして後ウマイヤ朝の実権を掌握したムハンマド・イブン・アビー・アーミル、別名マンスールのこと(在任九七八―一〇〇二年)。王家の出身ではない彼は、イスラーム支配者としての正当性を強調するため、イベリア半島北部のキリスト教諸国にたびたびジハードを実行した。彼がコルドバの東郊外に建設した新都マディーナ・ザーヒラは荒廃したが、大規模な拡張工事を実施したコルドバの大モスクは現在も残されている(関哲行・立石博高・中塚次郎編『世界歴史大系 スペイン史一 古代―近世』、九一九―九二頁)。

- (59) *balāʾ al-Walid*. ウマイヤ朝カリフ・ワリード一世が八世紀初めにダマスカスに建設したウマイヤ・モスクのこと (*Prolegomènes*, vol. 2, p. 226; 『歴史序説』第二巻、四四七頁)。ここではダマスカスのモスクよりもコルドバのモスクの方が立派であると主張している。

- (60) *Malik il-ʿaql wa ʿAql*. マーリクとアキールの兄弟は、三世紀のヒラーの王ジャズィーマの近臣。行方不明になった王の甥アムルを探し出したことで、王と親しくなった (*al-Ibar*, vol. 2, pp. 260-261)。

- (61) *khafī yujāwir bi-thaql*. 直訳すると「重いものに隣接する軽いもの」。別の著作での引用 (*al-Iḥtiṭā*, vol. 4, p. 582) では *yujāwabu* とあり、その場合は「重いものによって応えられる軽いもの」となるが、いずれにしても意味するところは定かではない。

- (62) アリフはアラビア文字の最初の文字で、縦線で書かれる。ハムザは声門閉鎖音を示す小さなアラビア文字で、しばしばアリフの上に書かれる。

- (63) アラブの社会では、古来より平凡な人間を指して、アムルやザイドのような者と言いつつ習慣があった。

- (64) 「あらゆる獲物は、野生ロバの中にある (*kull sayd fi jawf al-faraʿ*)」という慣用句があり、「何でも含んでいて、他にはなにも要らないようなもの」の意。ありとあらゆる美德を含んでいるコルドバのことを示している。

- (65) *al-Rusāʾa*. 後ウマイヤ朝を建国したアブドゥッラフマーン一世が、故郷シリアの

- ウマイヤ朝の同名の宮殿をしのんで、コルドバ郊外に築いた離宮。シリアから取り寄せてこの離宮に植えた椰子をうたった彼の詩は有名。バグダードにも同名の宮殿がある。(『*Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed, Article on "al-Rusafa")。
- (66) *dar al-salam*. 「平安の町 (*madinat al-Salam*)」と呼ばれるバグダードのこと。ここではバグダードよりもコルドバの宮殿の方が優れていると述べている。
- (67) プハーリーのハディース集の中の「聖戦」の章に収録されている「馬の前髪には復活の日まで恵みが結びついている」というハディースをふまえた表現。ここでの恵みとは来世の報いと現世の戦利品のことだという。「傑出した者たち」の章にも、「馬の前髪にはよいものが結びつけられている」あるいは類似のハディースが挙げられている。牧野信也訳『ハディース イスラーム伝承集成』、中央公論新社、二〇〇一年、第三巻、一一九—一二〇、四一五頁。
- (68) ジャーヒーリーヤ時代の詩人イムルウルカイスの詩の冒頭部。ジャーヒーリーヤ時代の代表的な詩を取めた詩集『ムアッラカート』にも収められている。ここで「恋人とその住まい」にたとえられているのは、キリスト教徒に奪われたコルドバのことであろう。訳文は、池田修「アルムアッラカート試訳」『関西アラブ・イスラーム研究』三、二〇〇三年、一一—三頁による。
- (69) イスラームにおいて豚肉食が禁じられていることをふまえた表現。
- (70) 註四六参照。
- (71) *yawm Dāḥis wa al-Ghāḥra*. アブス族カイス・イブン・ズハイルとズブヤーン族フザイファ・イブン・バドルの行なった賭馬競争が原因となり、両集団の全面抗争に発展したジャーヒーリーヤ時代の戦争。ダーヒスとガブラーは、このときの競争馬の名前。四〇年間に渡って続き、多くの要人が失われたとされる。
- (72) *yawm shi'b Jabala*. ジャーヒーリーヤ時代の三大合戦の一つ。ガタファーン族の内紛が周辺の諸集団を巻き込む戦争に発展して生じた会戦。アブス族とアーミル・イブン・サアサア族の連合軍が、ズブヤーン族とタミーム族の連合軍をアラビア半島中部のジャバラ溪谷に誘い込み、後者の軍勢は大敗を喫した。
- (73) *Baḥn 'Aqil*. ジャーヒーリーヤ時代に、無頼漢として名高いズブヤーン族のハリス・イブン・ザリームが、アーミル・イブン・サアサア族のハリッド・イブン・ジャアファールを殺害した事件。集団間で大きな戦闘があったわけではない。
- (74) *yawm Dhū Qat*. ジャーヒーリーヤ時代の三大合戦の一つ。サーサーン朝ペルシア帝国とアラブ諸族の連合軍を、バクル・イブン・ワイル族が撃破した戦い。ムハンマドが預言者として活動していた六一〇—二〇年代に行われたと推測されているが、ムスリムによる征服戦争の一環ではない。
- (75) *yawm al-Kaḍd*. ジャーヒーリーヤ時代に、スライム族とキナーナ族の一部が争いとなり、キナーナ族の勇士として有名なラビーア・イブン・ムカッダムがスライム族のヌバイシャ・イブン・ハビーブに殺害された事件。集団間で大きな戦闘があったわけではない。
- (76) 「クルアーン」第五章第二三節。モーセがバレスティナに攻め入ろうとした際、巨人を恐れてこれに従おうとしないイスラエルの民をたしなめて、敬虔な者二人が言ったという言葉。
- (77) *mustatraqa*. 動詞 *istatraqa* の受動分詞で、直訳は「道をあけて通すよう求められた塔」。グアダルキビル川にかかる橋の南のたもとにそびえるカラオーラの塔のことを指していると思われる。川の南岸からコルドバ市内へ入るためには、この塔の門入って橋を渡る必要があった。現存する塔は、この戦いからまもなくしてカステイリーリヤ王となったエンリケ二世によって、一三六九年に大規模な改修をほどこされたものである。なお、同じ書簡の他の引用では、*mustatraqa* としている。この場合は「逸品と見なされた」という意味になる。cf. Ibn al-Khaṭīb, *Rayḥānat al-kutāb*, vol. 1, p. 199; Ibn al-Khaṭīb, *al-Iḥāṭa*, vol. 4, p. 584; Ibn al-Aḥmar, *Nahṭ*, p. 284.
- (78) イブン・ハティープが起草したナスル朝からマリーン朝宛の書簡によれば、このときムスリム軍は攻城器械と人の配置の問題から戦闘を中断しなければならなかったという。Ibn al-Khaṭīb, *Rayḥānat al-kutāb*, vol. 2, p. 19.
- (79) 雨によりコルドバ占領断念を余儀なくされ、代わりに周辺地域を荒らす方針に転じたことは、註七八のマリーン朝宛書簡にも記されている。
- (80) ここでは巡礼を連想させる一連の語を用いながら、戦闘後の帰還の様子が描写されている。「喉を切る (*naḥ*)」は巡礼完了に際して羊などを屠ることを、「石礫 (*imār*)」は石投げの儀式を指す。また、「一斉に動く (*atāda*)」は、巡礼において群衆がある地点から別の地点へと集団で移動することを示す動詞である。
- (81) 「クルアーン」第六八章第一九—二〇節。
- (82) *yawm al-Ghamīm*. ガミームはマッカとマデイナーの間の地名。キナーナ族とフザア族の間で戦いがおこなわれた。「フィジャールの戦い」の一部で、預言者ムハンマドが一四、一五歳(あるいは二〇歳)の時に起きたとされる。『預言者ムハンマド伝』第三巻、二四四頁；第四巻、六一頁。
- (83) 「預言者ムハンマド伝」のガミームの戦いの記述では、バーンの木の香りについて何も語っていない。
- (84) 「クルアーン」第五章第四二節。
- (85) コルドバの南を流れるグアダルキビル川が増水したことを描写している。
- (86) *Asad ibn al-Furāt*. イフリーキヤにおける初期のイスラーム法学者アサド・イブン・フラート(八二八年没)の名をもじった表現。アサドは東方に学び、形成過程にあったマリーク派法学やハナフィー派法学を学んだ。帰国後、アグラブ朝に

よりカーデイーに任命された。さらに八二八年にはシチリア遠征軍の指揮官に任じられ、シラクーザ包囲中に没した (*Encyclopaedia of Islam*, three, “Asad b. al-Furat”)。彼の父の名フラートはユーフラテス川と同じ綴りであり、川からの連想で彼の名が選ばれたのであろう。

(87) 『クルアーン』第九章第二節をふまえた表現。

(88) 『クルアーン』第二章第二五六節や第三章第二二節に見られる表現で、それをしつかりと握っていれば安全が得られる把手、すなわち神からの保護を期待できる正しい信仰のこと。

(89) 神が人類を創造し、終末に際して全ての人類を再び復活させることを指している。『クルアーン』第二章第一〇四節参照。

(90) この書簡に記されている一連の戦いでナスル朝と同盟関係にあったカステーリヤ王ペドロ一世のこと。ペドロ一世は支援の代償としてナスル朝に四つの城砦を引き渡した (*Ahmad Mujaṭṭar al-ʿAbbādī, El Reino de Granada en la época de Muhammad V, p. 82*)。

(91) Rum. 「ローマ」を語源とする語で、マシユリクではビザンツ帝国のギリシア人を指すのが一般的。しかし、マグリブやアンダルスでは、漠然とキリスト教徒を指す際にも用いられる。

(92) Qayrawān-kum. カイラワーンはイフリーキヤ中部に位置する都市で、六七〇年、アラブ・ムスリム勢力が最初にマグリブに建設した都市。マールイク派法学をはじめとするイスラーム諸学問の一大中心地として発展した。当時は、この書簡の宛先であるハフス朝の支配下にあった。

(93) ハフス朝が、唯一神信仰(タウヒード)を強調するムワッヒド朝の後継者を自認していることを念頭においた表現であろう。「イブン・ハルドゥーン自伝2」四五頁、註一四参照。

(94) 具体的にどの出来事を指しているのかは不明。この書簡の宛先であるアブー・イスハークの治世には、特に目立った出来事はないが、フランス王ルイ九世によるチュニスへの十字軍(一二七〇)など、ハフス朝下で起こったキリスト教徒関連の事件全般のことを示しているのではないかと思われる。

(95) ハフス朝が支配するイフリーキヤが、預言者ムハンマドと直接に接したイスラームの第一世代である教友たちによってイスラーム支配下に入ったことを示す。一方、ナスル朝の支配するアンダルスの征服は教友に続く第二世代以降の人々によって行われた。

(96) *ṣulāṭ al-Farūq*. 「真偽を分かつ人(ファールーク)」とは、第二代正統カリフ・ウマル・イブン・ハッターブの異名。ハフス朝の名祖アブー・ハフス・ウマルは、アトラス山脈西部に住むマスムーダ系ベルベルのヒンタータ族の出身だったが、

名が同じことからハフス朝下では第二代正統カリフ・ウマルの系譜に連なるとされていた (*al-ʿIḥwān*, vol. 6, p. 275)。

(97) イブン・ハルドゥーンは、本書において、この書簡を途中から引用している。書簡の全文は、イブン・ハティープ自身が書簡集の中で引用している (*Ibn al-Khaṭīb, Rayḥānat al-furūḥ*, vol. 2, pp. 176-179)。

(98) *Abū al-Faḍl al-Riḍā wa Abū Zayd*. アブー・ザイドは、一般に知られているイブン・ハルドゥーンのクンヤである。ファドル・リダーについては、この時に生まれた子の名前と解すべきか、それとも「神に嘉せられた美德の持ち主」という意味に解すべきか不明であり、両方の可能性がある。しかしながら、現時点では、イブン・ハルドゥーンの息子の名前としては、一三八四年のチュニスからエジプトへ向かう途上の難破事件から助かったムハンマドとアリーが知られているのみである (*Ibn Khaldūn, The Muqaddima. An Introduction to History*, tr. Franz Rosenthal, Princeton University Press, 1967, vol. 1, p. xlvii)。従って、イブン・ハルドゥーンにファドル・リダーという名の子がいたかどうかについては、今のところ確たる史料裏づけがない。そこで本書では、原文どおりに訳出しておいた。

(99) この二行は、イブン・ハティープが星占いによってイブン・ハルドゥーンの息子の運勢を占った結果を伝えたものである。

(100) *al-Musharrḥ wa al-Kaṭīb*. *al-Musharrḥ* は木星、*al-Kaṭīb* は水星(utārid)を指す。木星は、イスラームの占星術では、幸運の星である。木星が幸運の星であるという観念は、イスラームに限らず、古くはバビロニア、インド、中国にも認められる。また、マグリブの人々は、水星を *al-kaṭīb* と呼ぶ。水星はイスラームの占星術では、他の惑星との関係次第で幸運の星にも不運の星にもなるという性質を持つ (*Jamāl al-Dīn al-Watwāṭi Muḥammad ibn Ibrāhīm ibn Yahyā al-Kutubī, Manāḥij al-fikr wa maḥāijj al-ibār*, ed. Fuat Sezgin, Frankfurt: Maḥad taʾrīkh al-ʿulūm al-ʿarabiyya wa al-Islāmiyya fi ʿiṣar Jamīʿat, 1990, vol. 1, p. 26; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “*al-Musharrḥ*”, “*Utārid*”。

(101) ホスローもアルダシールもサーサーン朝の皇帝の名前であるが、ここでは特定の人物ではなく、サーサーン朝の皇帝一般のことを指している。

(102) *al-Hudramiyya*. イブン・ハルドゥーンとその一族を指す。イブン・ハルドゥーンの祖先は、ヤマンのアラブ(南アラブ)に属するハド라마ウト族の出身である。「イブン・ハルドゥーン自伝1」、四九頁。

(103) *afīk al-tadwīr*. 天動説に基づく宇宙観によれば、各惑星には周転天球(単数形は *falak al-tadwīr*)と呼ばれる小さな天球があり、惑星はその周囲を回転する (*Abū ʿAbd Allāh ibn Mūsā al-Khwārizmī, Maqāṭib al-ʿulūm*, Leiden: E. J. Brill, 1968, p. 222; ビールニー著、山本啓二・矢野道雄訳「占星術教程の書(一)」『イスラーム世

- 界研究』第三卷、二〇一〇年、三四三―三四四頁。
- (104) 前掲註一〇三で説明したように、天動説に基づく宇宙観によれば、我々が地上から見上げる惑星は、すべて周転天球の周囲を回転している。また、イスラームにおいて、マドラサでは、伝統的に教師を学生たちが輪のように取り巻いて授業を受ける習慣が一般的であった。従ってこの一文は、イブン・ハティープが、この教師を取り巻く学生たちの輪、即ち車座を、天空で惑星を取り巻く周転天球に見立てたものである。
- (105) al-munir al-kabir: 直訳すると「大きな輝き」だが、太陽のこと。
- (106) 「イブン・ハルドゥーン自伝2」、四〇―四一頁参照。
- (107) Ibn al-Dāris. 不詳。直訳すると「学ぶ者の息子」であり、人名ではなく、単に「マドラサ madaris」「木を植えた人 ghāris」と韻を合わせるために選ばれた表現の可能性もある。
- (108) nasba. 校訂者の註によれば、正しくは al-nasba al-falakīya という。al-nasba al-falakīya とは、占星術において、将来に起こることを知りたい時に見る星々の位置が書き込まれた図のことである。占星図という訳語は、現在のところ、適当な訳語がないために便宜的につけたものである。
- (109) sinī tarbiyah-hā. イスラームの占星術において、人が生まれてから満四歳になるまでの期間を養育年 (sinū al-tarbiyah) と呼ぶ。イスラームの占星術では、生まれた人間が養育期に養育年(満四歳まで)を超えて生きるか、それとも養育年が終わる前に死ぬかをまずは見る(ビールニー「占星術教程の書(3)」、五三四頁)。
- (110) 校訂テキストでは、アヤソフィア写本にある「寿命 al-umr」という一語が欠けているので、これを補って訳した。
- (111) 原文は al-hudūd (hadd の複数形)。イスラームの占星術では、十二宮のそれぞれを五惑星(水星、金星、火星、木星、土星)の間で何度かずつ不等分に分割する。分割されたそれぞれを区界と呼ぶ (Khawāzīmī, *Majālih al-ʿulūm*, p.226; ビールニー「占星術教程の書(3)」、五〇一―五〇二頁, *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Hadd")。
- (112) 原文では wujūh (wajh の複数形)。顔(ワジュフ)とは、十二宮の各宮を三等分したものの(一〇度ずつに分けたもの)を指す (Khawāzīmī, *Majālih al-ʿulūm*, p.226; ビールニー「占星術教程の書(3)」、四九九―五〇〇頁)。
- (113) al-muthallathāt. 占星術における専門用語。占星術では、十二宮を四つに分割し、分割したそれぞれをイスラームではムサッラサ(三角宮)と呼ぶ。三角宮はそれぞれ三つの宮を含む (Khawāzīmī, *Majālih al-ʿulūm*, p.225; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "Muthallathāt"; ビールニー「占星術教程の書(3)」、四八〇頁)。
- (114) al-bayt. 占星術でいう家(ハウス)のこと。註三七も参照。
- (115) al-sharaf. 星の昂揚 (Sharaf al-kawkab) のこと。英語では exaltation と呼ばれ、占星術の重要概念である。星の昂揚とは、その星に関連づけられた宮の一定の度数のことである。星は、その宮の一定の度数において、権力の場所に対する君主の関係のごとく昂揚する。五惑星に太陽と月を加えた七つの星はいずれも一つの昂揚する度数を持つ。例えば、木星の昂揚はかに宮の一五度にあり、水星の昂揚は、おとめ宮の一五度にある (Khawāzīmī, *Majālih al-ʿulūm*, p.225; ビールニー「占星術教程の書(3)」、四九七頁; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on "al-Mushārāt", "Uṭārid")。
- (116) nayyir al-nawba. 太陽と月のこと。交替主星 (sahib al-nawba) ともいう。イスラームの占星術においては、太陽は昼の交替主星であり、月は夜の交替主星である(ビールニー「占星術教程の書(3)」、四八三、五〇五頁)。
- (117) bayt al-banīn. 占星術でいう五番目の家(ハウス)のこと。
- (118) al-burj al-muwallida. おそらくは、多産宮 (walūd) のことではないかと思われる。イスラームの占星術では、さそり宮、うお宮及びやぎ宮の後半分が多産宮に相当する(ビールニー「占星術教程の書(3)」、四六九頁)。
- (119) rās al-jawzahir wa dhanab al-tinnīn. ジャウザヒル (al-jawzahir) は、様々な読み方があり、史料によってはジャウザハル (al-jawzahar) とも読む。イスラームの占星術および天文学の用語であり、地球上の二つの円が交わる二点(交点)のことである。ジャウザヒルという名前は、その二つの交点のいずれにもあてはまる。一方を他方と区別する際には、惑星がそこを通過して北に行く交点を頭 (rās) と呼び、そこを通過して南に行く交点を尾 (dhanab) と呼ぶ。頭は昇交点のことであり、尾は降交点のことである。交点はまたその姿からティンニン(竜)の頭や尾とも呼ばれる (Khawāzīmī, *Majālih al-ʿulūm*, p.220; ビールニー「占星術教程の書(1)」、三三九、三六二頁)。
- (120) tabwīl al-sinnī. 太陽が年の初めにあった場所に戻る(ビールニー「占星術教程の書(2)」、二一九頁)。
- (121) al-mawālīd. 誕生時とは胎児が母親の腹から出る時のことで、その時の天体の様子を観察して占星術の判断に用いた(ビールニー「占星術教程の書(3)」、五三六頁)。
- (122) ʾashīr-hu. 一〇番目 al-ʾashīr は、スルターンの家 (bayt al-sulṭān) のこと (Khawāzīmī, *Majālih al-ʿulūm*, p.228)。
- (123) qalb al-ʾasd. 「獅子の心臓」の意で、しし座の主星レグルスのこと。
- (124) 占星術でいう一二番目の家(ハウス)のこと。
- (125) al-tasyīr. 人間の寿命の長さを計算するために人の手によって作成される弧のこと

である。専門的なテクニクとして、プトレマイオス以来研究され、イスラーム世界でも発達した(「ビールニー」占星術教程の書(1)」「三〇四頁: *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “al-Tasyr”)

- (126) wa saqata al-shaykh al-harim min al-daraj fī al-bīr. イスラームの占星術において、井戸 (bīr, 複数形 ābār) とは、惑星の活動が弱まる度数のことである。老人 (al-shaykh al-harim) も梯子 (al-daraj) も占星術に関する語と思われるが、正確なところは不明である。また、占星術の観点から、この一文全体が何を意味するのかも良く分からない(「ビールニー」占星術教程の書(3)」「五〇五―五〇六頁)。

- (127) al-muḡatī. マグリブの人々は、土星 (zuhar) をムカーティル (muḡatī) と呼ぶ。また、土星はイスラームの占星術では凶兆の星である (Jamāl al-Dīn al-Waiwāt, *Manāḥij al-fikr*, vol. 1, p. 26; *Encyclopaedia of Islam*, 2nd ed., Article on “Zuhar”)

- (128) al-wabā. イスラームの占星術では、惑星の宿(その星に関連づけられた宮)と向かい合っている宮を害 (wabā) と呼ぶ。例えば、土星の宿はみずがめ宮とやぎ宮であるが、みずがめ宮はしし宮に、やぎ宮はかに宮にそれぞれ対面している。このことから、しし宮とかに宮が土星の害ということになる (Khawāzmi, *Maḡātib al-wilām*, pp. 226-227; 「ビールニー」占星術教程の書(2)」「四九六―四九七頁)。

- (129) al-Hayḡ. 占星術における指示星のことであり、寿命を示すものである。ハイラージュは太陽や月など五つある (Khawāzmi, *Maḡātib al-wilām*, p. 230; 「ビールニー」占星術教程の書(3)」「五三四―五三六頁)。

- (130) 「絞め殺された動物」から「打ち殺された動物」までは、イスラームにおいて、神が信徒に食することを禁じたもの(『クルアーン』第五章第四節)。イスラームでは、食に関する禁忌(ハラーム)として、「豚肉、他の神への供物としての肉、自然死を含め頸動脈を切らないで死んだもの」は食することが禁じられている(鈴木貴久子「食の規範」大塚和夫他編『岩波イスラーム辞典』岩波書店、二〇〇二年、四九六頁)。

- (131) It fī sharḥ ḥamdi-hi nāqa wa jamāl. の一文は、‘lā nāqat fī ḥadīth wa lā jamāl’ (直訳すると、「私にはこのことについて、雌ラクダも雄ラクダもない」という諺を逆にしたものである。この諺の由来とされる逸話によると、ジャッサース・イブン・ムッラ (Jassās ibn Murra) の一族とクライブ・イブン・ワイル (Kulayb ibn Wā'il) の一族の間でラクダの殺害をめぐる戦争が起こった時、ジャッサースの一族の中にいたハリス・イブン・ウバード (Harith ibn ‘Ubad) とこう男が、この文句を言って戦いに加わることを拒否した。ハリスが言わんとしたことは、「私の雌ラクダや雄ラクダがクライブによって殺害されたわけではない」、換言すれば、「私はこの戦いには何の関係もない」という意味になる。イブン・ハ

ティープの書簡の中のこの一文は、この諺を踏まえ、意味を逆にしたものである。直訳すると、「私には貴兄に対する称賛をはっきり述べることにについて、雌ラクダも雄ラクダもある」、即ち「私には、貴兄に対する称賛をはっきり述べることにについて関係がある」というほどの意味になる。アラブにとって、ラクダが乗用、駄用、食用を問わずいかに重要だったかを示す諺といえよう (al-Muḥaddal ibn Muḥammad al-Dabūt, *Amthal al-‘Arab*, ed. Ḥsān ‘Abbās, Beirut, 1981, pp. 129-131; 堀内勝「ラクダ」『岩波イスラーム辞典』、一〇三五―一〇三六頁)。

- (132) khalwa. スーフイズムの用語で、「隠遁」「独居」などを意味する。

- (133) 原文では *barqun yushām*. 直訳すると、「期待される稲妻」というほどの意味になるが、クルアーンでは雷は、恐怖の喻えとして表現される場合もあるが、雲や雨の前兆として希望を人々に与えるものとして表現されることもある(第一三章第二節、第三〇章第二四節)。そのことから、雷によって期待されるのは、雲や雨ということになる。それを踏まえて、ここでは *barqun yushām* を「慈雨の前兆である稲妻」と訳出することにした(大川玲子「雷」『岩波イスラーム辞典』、二八四頁)。

- (134) ḥaddith mā warā’a-ka yā Hishām. mā warā’a-ka yā ‘Isām と同じ諺をもじった表現。人に知識を尋ねる時に使われる諺であり、直訳すると、「イサームよ。お前の背後にあるものは何か」というほどの意味になる。この諺の由来とされる逸話はいくつか伝えられている。その一つによると、ラフム朝(三世紀末―六〇二)の王ヌウマーン (al-Nu’mān) が病気になる、彼が死んだという噂が広まった時、詩人ナービガ・ズブヤーニー (al-Nābiḡa al-Dhubyānī) がヌウマーンの侍従(ハージブ)であるイサーム・イブン・シャフバル (‘Isām ibn Shāḥbar) にこの文句を口にして彼の状態を尋ねたとされている。ナービガがこの文句によってイサームに尋ねたのは、ヌウマーンが死んだと噂されているがその真偽(彼の病状)はどうかということであろう。イブン・ハティープの書簡では、イサームがヒシャームに換えられている。イブン・ハティープがイサームをヒシャームに換えたのは、原文では *barqun yushām fa-yuḡal* と綴った後にこの諺が続いていることと関係する。つまり、イブン・ハティープは、*yushām* からの繋がりを考え、イサームをヒシャームに変えたのであり、ヒシャーム自体に特に意味はないと解すべきであろう。しかし、この一文が前後の文脈から考えて何を意味しているのかはいまいち判断としな(‘Abū al-Faḍl Ahmad ibn Muḥammad ibn Ahmad ibn Ibrāhīm al-Naysabūrī al-Maydānī, *Majma‘ al-Amthal*, ed. Muḥammad Muḥyī al-Dīn ‘Abd al-Ḥamīd, Cairo, vol. 2, pp. 263-264)。

- (135) shaykh-na. 具体的に誰を指すのかは不明。